

話された言葉

室 伏 武

愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴悪の言語なきなり。世俗には安否をとふ礼儀あり、仏道には珍重のことばあり、不審の孝行あり。慈念衆生、猶如赤子のおもひをたくはへて言語するは愛語なり。徳あるはほむべし、徳なきはあわれむべし。愛語をこのむよりは、やうやく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろしられずみえざる愛語も現前するなり。現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、世生生にも不退転ならん。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず。

——道元 正法眼蔵菩薩睡四撰法（大久保道舟編 道元禪師全集 上巻

筑摩書房 昭和四十四年 七六六頁）

一 音声による言語的象徴

話された言葉 (spoken word) とは、音声による言語的象徴の意である。言語としての音声的象徴は、音声言語 (spoken language) や話し言葉と呼ばれているもので、表現主体である話し手の音声による言語的表出である。この音声的表現形式は、言語音としての音声記号と、その言語体系から成り立つものであり、話し手の思想や感情を聞き手に伝える媒体である。伝え合いの媒体としての言語的象徴は、話し手の発話による音声的象徴であるとともに、その聞き手の聴覚に訴える聴覚的象徴としての性格を併せ持つものである。この音声的なものと、聴覚的なものとは、話された言葉として一つに統一されたものであり、個々に存在しているものではない。また、伝え合いの様式は、「話すこと」と「聞くこと」とが相互に働き合いがなされるものであり、それは、動的で、かつ情緒的である⁽¹⁾という性格を持っている。そして、話された言葉は、話し手と聞き手との伝え合いの媒体であるということでは社会的なものであるが、話すことや聞くことにおいては個人的なものであると言うことができる。

このような音声的表現体系による言語的象徴である話された言葉は、その音声を媒介としていることから、話し手と聞き手との「対話」の形式において営まれる言語活動において作用するものであることを原則としている。この対話の形式は、話し手と聞き手との人間関係を基盤として、特定の時間と空間とからなる言語活動が営まれる「場」において行なわれる伝え合いのことを言うものである。この対話としての言語場は、話し手と聞き手とが有機的な相互作用に基づいて、真なるもの、善なるものや美なるものの真実を、話された言葉によって、「対話術」を用いて探究

する場となるものである。そして、このことは、話された言葉による人間形成を意味するものであると言える。このような対話の世界は、話し手と、聞き手との人間関係の枠組みにおいて、

ひとがふさわしい魂を相手に得て、ディアレクティケーの技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつけるときのことだ。その言葉というのは、自分自身のみならず、これを植えつけた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬまま枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新たな言葉が新たな心の中に生れ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。⁽²⁾

生きた言葉を生成させるばかりでなく、人間存在の中核をなすものであって、「人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力によってかちうるのである。」⁽³⁾ こうした対話の世界は、表現主体と理解主体との動的な相互作用によって、生き生きとして展開される人間の行動である。そのためには、「対話術」が必要とされるものである。そして、この言語場は、言葉の伝え合いの仕方から言って、「閉された社会」であると言うことができる。とはいえ、表現主体と理解主体のひとりひとりにおいては、限りなく開かれた世界であり、それぞれの人間性を拡張することができることに特徴があると言える。

このような話された言葉の形成とその文化の創造は、人間が創り出した最高の創造物であり、すべての人間が持っている所有物である。その性格は、したがって、それが存在している社会の構造や様相と一体的なものであると言うことができる。この話された言葉の起源は、まだ明らかにされていないし、論のあるところである。その説明は、われわれの大きな課題である。

日本語の起源・成立の問題は当然日本人の起源の問題とも結びつく。日本人はどのようにして成立したか。また日

本文化はどのようにして発展してきたか。それも、日本語の問題に関連した、決して切り離すことのできない問題である。⁽⁴⁾

話された言葉は、日本人の誕生と国家が形成されたときから今日に至る長い歴史の流れとかかわりあいながら、日本語とその文化が発展してきたと言える。この日本語の形成は、日本および日本人の確立を意味するものである。このような形成の過程において、外来の言語とその文化から強い影響を受けながら発達してきた。なかでも、朝鮮や中国の話された言葉や書かれた言葉、特に漢字文化——儒教・仏教などから大きな力を受容する。明治以降になると、欧米の言語や文化が支配的となり現在に至る。こうした長い歴史を経て、独自の日本語とその文化が展開してきたと言える。話された言葉は、文字とその文化を優位とする社会的風潮のかけにかくれて、その本質的な重要性を見失いがちであった。しかし、文字や印刷の発明よりも、最も重要な出来事であることを強調しなければならない。それは、人間が人間として存在するために、最も根源的なものであるからであり、日本人は、日本語によって、特に話された言葉によって統一されることによって、はじめて、真の日本人となることができるのだと言えることができるからである。

(一) 音声言語

このような話された言葉は、音声的表现体系である。音声言語は、身体的表現から生まれたものであり、音声と身体的表現とは分かち難いものであって一体的である。音声は、身体の一部である「音声器官」における声帯から発せられる言語音と呼ばれるものである。それは、身体の一部による表出であるから、その発話者の個人的な表現であり、個人的であるところに著しい特徴がある。この音声は、それが話し分け、聞き分けられる共通の音声として識別され

て、一つのまとまった言語となり、その意味を表わすことができる。したがって、音声言語は、言語音としての音声記号が、言語体系に基づいて表現されたものである。この話すという表現様式は、それを聞くという理解様式の媒体としての共通性がなければならぬ。話す＝聞くということは、その伝え合いのあり方によって、音声言語の姿が決められるものである。

(7) 話す言葉——他者に対する自我の表現の形式

このような音声による言語的表現様式は、身ぶり、手ぶりや顔の表情などの話し手のすべての身体的表現を伴うものである。この身体表現は、話し手の感情の表現であり、話し手の「心の働き」の象徴形式である。そこには、その身体的表現の一部としての「音声」による表現と一体的なものであって、これを分かつことはできない。

身体的表現としての音声は、「物事ヲ象リウツス」ものであり、「形アリ、姿アリ、心アリ。」と、鈴木腹が『雅語音声考』において述べている。音声による表現は、単なる思想や感情を表現する記号ではなく、物事の形象に対応するものであるとしている。また、この音声の根源には、

一 鳥獸虫ノ音ヲウツセル言

二 人ノ声ヲウツセル言

三 万物の声ヲウツセル言

四 万ノ形・有様・意・シワザヲウツセル言

の四つに分け、「声ヲ以テ声ヲ写セル」ものと「声ヲ以テ意口形ヲウツセル」ものとがあるとしている。この鈴木

眼の音義的な見解は、平田篤胤に継承される。その著『古史本辭経』卷之二において、

物あれば必ず象あり。象あれば必ず目に映る目に映れば必ず情に思ふ。情に思へば必ず聲に出づ。其聲や。必ず其の見る物の形象に因りて。其の形象なる聲あり。此を音象と謂ふ。

としている。それは、言霊の思想から生まれたものである。そして、大國隆正は、言葉の根源を「五十音図」に求め、そこに天地の道理が見現し、すべての根本とする思想である。それはまた、契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤等の国学の流れと一致するものであると言えよう。

このように話す言葉は、天地万物から生まれた物事の形象が、音声によって表現された音象である。それは、人間の「心の働き」とその象徴としての「こと」が音声によって表現された音声言語と一体をなすものであると行うことができる。そして、そこには、天地の道理と、人間の道—生きることが具現されたものであると考えられる。

そして、この話す言葉は、表現主体である話し手が、聞き手に対して「話す」という行動様式において表現されるものである。話し手が、音声を媒介とする自我の表現であり、それは、きわめて自己中心的な性格のものであると言うことができる。この自己表現としての話す言葉は、内と外、既知と未知、上と下や同輩などの他者との人間関係のあり方に基づいて行なわれるものである。そこには、日本の社会的状況が大きく支配していると言うことができる。

(4) 聞く言葉——自我における他者の受容の形式

次に、音声言語は、聞き手が「聞く」という理解の様式であり、音声による話し手の思想や感情を受容するための媒体である。この聞くという理解様式は、話し手の身体的表現を「見る」ことと、話された言葉を「聞く」ことであ

り、それは、同時に行なわれる行動である。このような、理解作用は、その主体である聞き手の自我において、他者を受け入れることである。したがって、聞くということは、聞き手の他者との枠組みにおける自我のあり方に深いかわりがあると言える。

このような理解作用における「見る」ということは、話し手が発話におけるすべての身体的表現を読み取ることである。そこには、聞き手の直観的な認識が働き、音声とそれを支える話し手の「心の働き」を身体的表現や音象を手がかりとして理解する作用が働いている。それは、直観的思考であるとともに、最も感情的なものであるということができる。そして、この読み取りは、聞き手の自己中心的なものであり、自我による他者を理解することである。このことは、沈黙の世界であり、それは、黙読であると言うことができる。

また、聞くということとは、話し手の音声聞き手の聴覚を通して、それを識別し、聞き手の音声とその言語体系によって理解することである。この聴覚的認識は、音声を聞くことに始まり、それを弁別して、まとまりとしての言語体系にしたがって、その意味と意味するものを聞き取ることである。この聞き取りは、聞き手の言語体系とそれを支えている自我とそれをとりまいている人間性の総体として、話し手とその話す言葉を受容することである。また、聞き手の話す言葉の受容は、聞き手の精神的状況に支配される。その結果、聞き手は、話す言葉の受容が、完全であることもあれば不完全な場合もあり、それを拒否することもある。

このような聞く言葉は、それを受容するというとき、話す言葉の「聞きやすさ (listenability)」の問題がある。この聞きやすさは、話し言葉の理解性の基準である。それは、話し言葉のわかりやすさ、おもしろさの問題であり、語いの難易度、文の長さ、文脈における予測性、音声の明瞭さやリズム、音量や、間などの諸要因がある。この聞きやす

さは、話すということであるよりは、聞くということの視点に立つものである。それは、話す言葉は、それを受容する聞き手にとっては、すべて聞く言葉となるからである。

(ウ) 対話——言語場における人間関係の形式

音声言語は、基本的には、「対話」と呼ばれる言語場において存在するものである。話し手と聞き手とが、特定の時間、空間における人間関係の枠組みの中で営まれる音声による言語活動である。なかでも、対話という言語活動は、話し手と聞き手との動的な相互作用としてとらえることができる。そこには、対話術があつて、真実を探求しようとする哲学がある。この対話としての言語場における時間と空間と、そこで展開される言語活動の主体者の人間関係は、これを分かつことができないものであり、その総体として存在するものであると言える。

このような言語場における時間と空間とは、対話を条件づける要因とも言うべきものである。外的条件づけとしては、言語場を物理的に設定するものであり、言語環境を構成するものである。それは、対話の枠組みを人間的要因とのかかわりにおいて決定づけるものである。内的条件づけとしては、音声言語のあり方や伝達内容を決めるものである。そして、この時間と空間とは、表現主体である話し手が専有するものであり、その姿は、未来へ走りつづける乗り物の中にある乗客のようなものである。乗り物は、過去から、現代へ、そして未来へとひた走りに走る（時間と空間）。その走る乗り物の中に乗っている乗客（主体者）は、その乗り物の中で占めている空間（それは走りつつある）において、対座している聞き手と、過ぎてゆく沿線の風景との場において言語活動が行なわれているのである。

このような言語場における話し手と聞き手との人間関係は、対話という形式において、その主体と客体とが入れ替

わりながら、相互の言語活動において成り立っている。とはいえ、この対話における主体は、話し手であって、それは、同時に乗り物における主体でもあると言うことである。したがって、対話は、表現主体である話し手である「自分」を中心として展開される。話し手である自分が知っていることと知らないこと、自分と他人、内と外、目上と目下、親しい人と親しくない人、好きな人と嫌いな人など「自分」をとりまく人間関係において言語活動が行なわれる。それは、人間関係における「自分」のあり方が、話された言葉を決定していると言える。別の言い方をすれば、話された言葉は、言語場において、「自分」という基準から「話す」ことによって成り立っていると見える。

このように音声言語は、その主体的な表現行動に、その本質がある。それは、言霊の思想を源流として、日本語による日本人と日本国家を統一することであると言ってよい。そこには、話された言葉が、その力によって、話したことが実現することを意味している。この言語に対する思想は、また、「まこと」を中心とする日本民族の精神でもある。

(二) 話される言葉

このような音声言語は、話し手と聞き手との対話の形式を基本として、さまざまな形態において展開されている。自己との対話である「独り言」、他人との対話である「会話」や多くの人びと同志の対話である「話し合い(討議)」、および話し手が集団を対象とする「演述」などがある。また、音声表現の様式として「語る」、「話す」「申す」「告げる」「語る」などの話し方がある。それらは、「話す」「読む」「見る」「聞く」「書く」といった人間の伝え合いの働きの関連において異なった方法が行なわれるからである。このように話された言葉の形態は、音声言語が繰り広げ

ている言語場、特に、その構成要因である人間関係の態によって決められると言える。そして、それぞれの形態は、最も特徴的な差異があり、話された言葉の姿を表わしている。さらに、こうした形態の多様性は、人間関係の多様性によるものである。

(ア) 独り言——自己との対話の形式

話される言葉の形態として、まず第一に、「独り言」と言われるものがある。これは、自己との対話であり、自分が自分に対して話しかけることである。そこには、話し手としての主体と、聞き手である主体との分離がみられる。この自己の分裂は、その主体がばらばらになっている姿を自己認識の結果として起こる現象である。したがって、自己における二人の自分を発見できない精神的な病における独り言は、この場合除外されなければならない。なぜならば、話し手だけが存在し、聞き手がそこに存在しないから、対話を喪失してしまっているからである。

(イ) 会話——他人との対話の形式

次に、話される言葉の形態として、「会話」と呼ばれるものがある。これは、他人と自己との対話であり、自分が他人に話しかけ、他人が自分に話しかけ、相互に話し合うことである。この話し合いは、話し手としての主体と、聞き手としての主体とが相互に入れ替りながら展開されるものである。それは、会話を形成する一対一の人間関係における対話の形成である。そして、この会話は、その言語場における人間関係のあり方によって、その姿が異なってくる。

(ウ) 話し合い——集団の中における対話の形式

話される言葉の第三の形態は、「話し合い」あるいは「討議」と言われるものがある。これは、集団における成員が、原則として、一つのことからについて話し合うものである。そこには、集団の力学が働き、その態度や行動を変革させるものであり、集団思考を展開することによって問題解決が行なわれることを特徴としている。

この話し合いの形式は、その集団の形成とそれが持っている問題と、その解決のしかたによって、対話の姿が異なる。特に、民主主義社会における話し合いの形式は、その社会を形成する基盤となるものである。

(エ) 演述——個人と集団との対話の形式

話される言葉の第四は、「演述」「講演」や「講義」などと呼ばれているものである。それは、個人としての話し手が、集団としての聞き手に話すことである。これには、「語る」「話す」「申す」「告げる」などの話し方があり、そこには、話し手と聞き手との人間関係のあり方や、伝達すべき内容によってさまざまな形がある。この個人と集団との対話の形式は、集団を変えることであり、社会形成の手法としての意味を持っている。

このように話される言葉は、言語場における人間関係の姿によって、その形態が異なるものである。(ウ)は、個人としての人間形成に、(ウ)は、集団としての人間形成と、それらを通して、社会形成が達成されると言うことができ。それは、話される言葉が本質的に具有している「ことばの力」によるものであるとよい。

二 話された言葉の世界とその文化

すでに明かにしたように、話された言葉は、われわれの身体の発声器官から発される音声による言語的象徴である。したがって、話された言葉は、最も人間的なものであると言うことができる。われわれ人間は、話された言葉によって人間として存在することができると言える。この人間における言語的統一は、話された言葉が持っている「ことばの力」が、ひとりひとりの人間と、それをとりまいている人間関係の枠組みにおいて、個人や集団に作用する結果である。われわれ日本人は、日本語とその文化によって、日本民族の精神と、それに基づいて日本国家を形成し今日に至っている。それは、他の国々の国家や民族とは異なった固有な文化を確立している基盤であると言うことができる。したがって、われわれは、日本語とその文化を發展させることなしに、日本人および日本国家の進歩はあり得ないと信ずる。

(一) 話し言葉の人間——言霊の思想による言語的統一

わが国には、古代から「言霊」の思想があり、それは、日本の民族精神を形成してきた。山上憶良が、「好去好來の歌」において、

神代より 言ひつてけらく 空みつ 大和の国は 皇神の 敵しき国 言霊の 幸はふ国と 語りつき 言ひつがいけり 今の代の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり(『万葉集卷五』八九四)

と歌っているように、言霊の思想が日本民族の精神として存在してきた。われわれが発する話された言葉には、精霊が宿っていて、その霊の力によって、表現した事が実現すると信ずることである。したがって、言葉を話すということは、希求する事実を実現させる力がある。そのため、祝詞、寿言、枉言や忌詞が生まれ、言挙を慎しむことが起る。それは、話された言葉が、「まこと」の人間を形成し、それが日本国家を誕生させたのである。

この言霊による人間やその集団の形成、すなわち、話し言葉による人間的統一は、その話し言葉の根源である「神ながらの道」において実現されたものである。この道は、本居宣長によって完成された『古事記』における神のはじめた道であり、鹿持雅澄によって大成した『万葉集』の皇神の道義と言霊の風雅の探求である。それは、最もよくわが国の歌道において継承される。このことは、「まこと」の日本精神によって統一した国学の道でもある。

このように話された言葉によって統一された、「話し言葉的人間」は、日本古典の精神を持った人間であり、「神ながらの道」をゆく人間であると言える。このことは、新しい国学、ないしは日本学を、現代という社会において探究しなければならぬ。日本学という学問の確立と、その学問による日本、日本人の形成は、われわれに課せられた課題であって、その成否は、日本の将来のあり方にかかっていると云って過言ではない。

〔付記〕 このような話し言葉的人間の形成について、一つの事例がある。それは、現在、世界の注目を集めているイスラムに見ることが出来る。ジャーヒリーヤ時代のアラビア半島は、多数の部族が各地に割拠し、争いが絶えない。それは、無軌道、腐敗と血なまぐさく荒れすさでいた。こうした半島に、預言者ムハンマドが現われ、神の啓示を伝えることによって、不浄な環境を浄化し、まことの人間性を高揚し、平和な新しい社会を形成した。イスラム教という宗教による人間とその社会の統一である。そこには、預言者のムハンマドが神のことはを「話す」(啓示) することであった。やがて、神のことはは、信徒たちによ

って書き記された聖典『コーラン』がまとめられた。それは、「アル・クルアーン」(読む、誦える)と言ひ意で、それを読み、誦えることによって信仰がなされる。また、『コーラン』は、アラビア語の亀鑑として、その標準化と、アラブ諸国の文語における言語統一の役割を果たしてきた。それは、アラブ人の偉大な遺産として今日に及んでいる。このことは、神のことばの啓示としての性格を持つものであるが、まさに、話し言葉による言語的統一された人間であり、社会であると言ふことができる。

(二) 話し言葉の文化——日本文化の源泉

話し言葉の世界は、すべての人びとのものであり、そこには、話し言葉の文化が形成されている。それは、話し言葉がその所有する者の社会によって特徴があると同様に、話し言葉の文化は、階層性を持つていふと言へる。この階層性は、それぞれの集団における人間関係のあり方に基づくものであり、その集団構造の差異として、言語とその文化が存在することになる。このことは、それを支えている言語生活の総体であると言ふことができる。したがって、この話し言葉の文化は、それを支えている日本民族精神や日本文化の姿をそこに見ることがができる。

(ア) 言霊の思想——神と人の道

話し言葉の文化を支える思想として、わが国には、言霊の思想がある。この話し言葉の神格化は、音声による言葉に宿る霊の力があることとあり、よいことも悪いことも言葉の精によって事実となって実現されるといふことを信ずる結果からであろう。したがって、話し言葉は、神と交通し得ると考え、人生をよりよいものにしよふという思想が生まれる。やがて、神と人とが一体となつて、「神ながらの道」が生まれ、日本民族の精神を形成する。また

一方において、話された言葉は、和歌や文芸を形成する。この世界は、人間の真実にしたがうもので、もののあわれを中心とする「人の道」が、神ながらの道の中に形成される。この神と人の道は、日本文化や日本精神を支える根源であり、話された言葉の文化であると言うことができる。

(1) 神との対話

祝詞や寿詞は、神を祭る儀式において「誦える」ときの言葉であり、神に申して人生の祝福を祈るものである。神からの言葉を聞き、神にむかって話すことで、人間は、神と一体となり、神にしたがうことによって幸せとなることができると考える。また、祭における神事歌謡や神楽歌も同じような性格を持つものである。やがて、話し言葉による和歌が詠まれるようになり、その文化は、一つの方向性を持つことになる。その意味において、和歌は、話された言葉の文化の最高の位置を確立することになる。それは、鹿持雅澄が

されば皇神の道をうかぶには、まづ言霊のさきはひによらずしては得あるまじく、⁽¹⁰⁾

として、『万葉集』に、皇神の道義と、言霊の風雅を求めたように、神と人との道が一つに統合される。そこには、神との対話があり、神の示す道が開られている。このことは、話し言葉の文化を貫いている基本的な思想である。

(2) 人生との対話

このような和歌は、「敷島の道」であり、「日本人のふみゆくべき道」である。⁽¹¹⁾この道は、「あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり。」(古今集仮名序)それは、「神ながらの道」と同じ道であって、日本と日本人のあべき姿を示したものであると言える。

この話された言葉としての和歌は、その表現主体の人生であり、それは、人生との対話である。この人生というこ

とは、日本人として生きることであり、日本国家の発展の礎である。そして、こうした人生と対話をかわすということは、日本精神としての「まこと」の心を心とする心情を培うことにはかならない。別の言い方をするならば、「大和心」を問うということであり、日本精神を自覚することであると言うことができる。このことは、われわれが「精神の世界」を創りあげる源泉となるものである。

(1) 話芸——大衆文化の源流

話し言葉の文化は、その性格から大衆文化と密接な結びつきがある。話芸は、その主流をなすものであり、謡曲、浄瑠璃、琵琶唄、祭文、落語、講談、浪曲、演歌などの「歌う芸」「語る芸」「話す芸」などがある。これらの大衆芸能は、話す言葉の文化であり、仏教における説教から生まれたものである。⁽¹⁾

仏教の伝来とともに説教が広く行なわれ、民衆の教化の手段として行なわれてきた。古くは、聖徳太子の勝鬘經講が、その起源であると言われている。仏教の經典や教義を説く、説教師が演技的表現や譬喩因縁談を用いて聴衆の心を引きつけることが必要であった。この説教師の卓越した話芸が、やがて大衆文化へと発展する。この上から下への教化運動は、民衆に迎えられるための方便が、やがて、民衆自身がそれを己れの文化財とすることによって、さまざまな話芸が生まれ発達することになる。そこには、もはや「説教」ではなく、楽しみと遊びとしての娯楽でしかなくなってしまう。ここに、日本人の行動様式と、民族性を最もよく見ることができると言える。この話し言葉を「話す」文化は、教化の手段から発達した「話芸」として、その大衆性に特徴がある。しかし、そこには、「仏への道」を失ったわけではない。しかし、明治維新以後、特に、戦後になって、その主流であった寺院における節談説教が衰退し

てしまふ。それは、宗教、生活、娯樂の中心が、寺院から他に移ったからである。この仏教の教化は、新しい道を探求しなければならぬことは、現代における重大な課題である。

このように、話された言葉は、言霊の思想と、それを支える神ながらの道であり、日本および日本人を形成するものである。この「ことばの力」を現代と未来へどのように展開するかということは、われわれの将来をかけた最大の課題であると言つて過言ではない。

注

- (1) Vachek, Josef. *Written Language*. Hague, Mouton. 1973. p. 15—16.
- (2) プラトン著 藤沢令夫訳 パイドロス 岩波書店 一九六七(岩波文庫)一三九—一四〇。
- (3) プラトン 前掲書 一四〇頁。
- (4) 大野晋 日本語の起源 岩波書店 一九七九年(岩波新書) 五頁。
- (5) 本居宣長 古事記伝 一之巻 直毘靈(本居宣長全集 第九巻 筑摩書房 昭和四十三年 四九—六三頁)。
- (6) 鹿持雅澄 萬葉集古義総論 其三 古学(萬葉集古義 第一巻 目黒書店 昭和二十年 一五三—一七五頁)。
- (7) 久松潜一 国学 至文堂 昭和十六年。
 夜久正雄 「敷島の道」といふ言葉をめぐるつて 亜細亜大学教養部紀要 第九号 一九七四年 五三—六六頁。
 夜久正雄 しきしまのみち略史・覚書 亜細亜大学教養部紀要 第二十号 一九七九年 一〇七—一二四頁。
- (8) 久松潜一 前掲書 二九三頁。
- (9) 飯森嘉助 アラビア語とイスラム 大学時報 第二十九巻 一五一号 五〇—五三頁 昭和五十五年三月。
 小笠原良治 イスラームは平和と寛容の宗教 大学時報 第二十九巻 一五一号 五四—五七頁。
- (10) 鹿持雅澄 前掲書 一五五頁。

(11)

夜久正雄　しきしまのみち略史・寛書　前掲書。

(12)

関山和夫　説教と話芸　青蛙書房　昭和三十九年。

関山和夫　説教の歴史的研究　法藏館　昭和四十八年。

関山和夫　説教の歴史　岩波書店　一九七八年（岩波新書　黄版）。